新刊紹介　コンラッドの伝記—新刊２点について

設　楽　靖　子

Zdzisław Najder, *Joseph Conrad: A Life.*
Translated by Halina Najder. Rochester, New York:
Camden House, 2007. xxiv ＋ 745pp.

John Stape, *The Several Lives of Joseph Conrad.*
London: William Heinemann, 2007. xxii ＋ 378pp.;
Arrow Books, 2008 (paperback).

一昨年 2007 年はジョウゼフ・コンラッド生誕 150 年の年にあたり、ロンドンのイギリス・コンラッド協会を中心に、記念行事が催された。3 月にはグリニッジの国立海洋博物館での一般向け連続講演会、7 月には協会の年次学会が開かれ、11 月には British Film Institute でコンラッド関連映画の連続上映が 1 ヵ月続いたようである。出身国ポーランドでも、8 月と 9 月にそれぞれ二つの大学で国際会議が開かれた。この記念の年に合わせた出版物としては、ケンブリッジ大学出版局が 1983 年から 25 年がかりで刊行を進めてきた 9 巻本の書簡集 *The Collected Letters of Joseph Conrad* の最後 2 巻が出版されて完結となったほか（最後の Vol. 9 は総索引と補遺）、ペンギン・クラシックスから新たな解説を施されたコンラッド作品数点の一括出版もなされた。ここでは、150 周年に合わせて出版された諸々のコンラッド関連出版物の中、新刊の伝記 2 点について述べる。

I

まず 1 点は、2007 年 4 月刊行の Zdzisław Najder 著 *Joseph Conrad: A Life* (New York: Camden House) である。これは、1983 年の刊行以来、コンラッド研究の定本的伝記と位置づけられてきた *Joseph Conrad: A Chronicle* (Rutgers University Press, 1983) の改訂版である。旧版は、ポーランドを代表するコンラッド研究者であるナイデルが、英米の研究者にはアクセス不可能な文献

や史料を使って 20 年がかりでまとめた労作であり、先行するポーランド語原版 (1980 年刊行) を英訳したものである。650 頁を超える大部のこの伝記は、コンラッドの生涯について、特に出身国に関する事実関係とその解釈について、1983 年の出版時点で確認可能であった限りにおいて、ほぼ決定版と言えるものであった。

ただし、旧版について難点がなかったわけではない。新旧版を比較すると明らかなように、旧版には年や日付の修正必要箇所がかなり含まれており、またポーランド関係の記述が強みとは言いながら、首を傾げさせる欠落事項もあった。たとえば、1914 年のポーランド再訪の際、当時の母国を代表する重要な作家たちと直接交流があった事実はすでに他書では記載済みであるが（たとえば、Knowles and Moore, eds., *Oxford Reader's Companion to Conrad,* 2000)、旧版の伝記にその言及はなかった。今回の改訂版では、こうした誤記や欠落部分が更新されているのみでなく、1980 年代以降の史料発掘の蓄積や、特にウクライナで可能となった現地調査による成果などが、極めて念入りな作業によって反映されており、全体のほぼ 4 分の 1 は加筆修正にあたる。[1] さらに、細かいことではあるが、写真の印刷改良や引用文のスタイル修正に至るまでその改訂作業は徹底しており、[2] 旧版を決定版として一度は通読したことがあるにしろ、あるいは chronological なレファレンスとして拾い読みで利用してきたにしろ、コンラッド研究の基本文献としては新版に買い換えざるを得ないであろう。

ここで、ナイデルによる伝記は、同年代のコンラッド研究者らの緊密な協力に支えられたものであったことを記しておく。日本のコンラッド研究者のあいだではほとんどその名が注目されることはないが、ハンス・ファン・マルレというオランダ人社会学者が、インドネシア（旧オランダ領東インド）研究を専門とする立場を強味としてアドバイザー役を担い、関連事項の証拠固めの作業をし、スタンダードな伝記作成に大きく寄与していた。ナイデルもファン・マルレも、そしてイアン・ワットも、第二次世界大戦の時期に青年期を過ごした体験を共有している。共産圏と言われた時代のポーランド国内において着実な研究が蓄積され、それが西ヨーロッパの研究者との緊密な協力のもとに共有され、英語版としてスタンダードな位置を得てきた経緯は、ある世代のコンラッド研究者たちの記憶の結実でもあ

り、遺産でもある。

そのことへの敬意ゆえに、またこの伝記の重宝さゆえに、コンラッド研究者のあいだで指摘されることは少ないが、人名・地名などのあらゆる諸事実を日付順に淡々と（延々と）記述していくナイデル本の手法について、「亀が特に堅いレタスの葉を食い進んでいくような」という見方もまたある。

II

コンラッドという作家の生涯について書くという作業は、まずは晩年のコンラッドと親交のあったJean-AubryとRichard Curleによって始まった。この「第一世代」の作業は、彼らが信奉した作家を神格化するものであったといえる。この不適切な状態を終わらせたのが最初の評伝、Jocelyn Bainesによる*Joseph Conrad: A Critical Biography* (1960) である。刊行以来すでに半世紀がたち、無効となった記述があるのは当然であるが、バランス良く作品解釈に踏み込んだ評伝として、今でも評価が高い。これを「第2世代」とすれば、1970- 80年代のFrederick R. Karl, *Joseph Conrad: The Three Lives. A Biography* (1979)と前述のナイデル本が「第3世代」にあたる。そしてこのほど自らを「第 4 世代」の書き手と位置づける著者によって新しく書かれた伝記が、John Stapeによる*The Several Lives of Joseph Conrad* (London: Heinemman) である。2007年8月刊行の本書は、コンラッド生誕150年に合わせて、著者がHeinemann (Random House) からの依頼を受け、英語圏読者を対象とする一般書として分量を指定されて書きおろしたものである。その意味で、「一般向け」を念頭に書かれているが、これが通常の「一般向け」として想像されるレベルのものでないことは、整備された地図・図版を見るだけでも明白である。著者ステイプが前述の*The Collected Letters*の少なくとも後半数点の実質的な編集責任者であり、コンラッドの書簡および関連史料に精通した研究者であること考えれば、本書は最適任者の手で執筆された伝記と言える。上記のナイデル本の改訂作業を実質的にサポートしたのも、この著者である。

このステイプ本は、一般向けとしての分量制限の中、膨大な伝記的諸事実を列挙するのではなく、著者が情報を選択的に提示している。Preface の

冒頭で、著者が「簡潔さ (brevity) を心がけた」(xi) と断わっているのは、上記のナイデル本とは異なる手法を意識して執筆したものであることを意味する。限られた分量の中で著者が意図したのは、"addressing not the work *and* the life, but, rather, as its title suggests, the *lives*, in the hope of offering a portrait of a man" (xii; 強調は原著) である。「作品と生涯」ではなく、「一人の人物の"いくつかの生"」を描く過程で著者が試みているのは、個々の伝記的事象を、ウクライナの風景なりイギリスの社会・文化なりの文脈の中で縦横に関連づけることであると考える。たとえば、第一章の冒頭、コンラッドの生まれた場所として Berdichev なる地名を出すにあたり、その地名から何も具体的に想起されないであろう読者のためにチェーホフやバルザックを引き合いに出す (1)。あるいは、1878 年に初めてイギリスに向かう航路で寄港したマルタがイギリスの直轄植民地だったことに触れて、その航路の地政学的意味を読者に気づかせる (34)。1904 年のイタリア滞在をめぐっては、「在外イギリス人の生体解剖者たる E.M. Forster」を引き合いに出す (145)。こうしたさりげない工夫は、全編に一貫している。加えて、記述される伝記的諸事実の要所要所に、各作品への評価が簡潔ながら極めて明解な表現で提示されており、この作家の作品と生涯に精通した「著者の声」が聞こえてくるような響きを持つ。こうした語り方の工夫により、作家の姿がその時代の中でくっきりと輪郭を見せてくるという効果をもたらしている、それがこの伝記の強みである。

また、本文中に注番号はなく、一見したところ読み物風の体裁ではあるが、巻末にまとめられた頁ごとの Notes は厳密かつ詳細な出典を記しており、それら出典のほとんどは書簡や新聞や近年公開された国勢調査などの一次資料である。特に、手紙類は、ケンブリッジ刊行の *Collected Letters* (つまり、コンラッドが書いた手紙) のみでなく、コンラッドが受け取った、ないしは言及された手紙を著者自身が網羅的に集めて編んだ書簡集 (Stape and Knowles 1996) から引用されたものが多い。そのことが、コンラッドの人生および作品を「イギリスの社会・文化という文脈の中で関連づける工夫」を支える具体的な柱となっているのである。その意味で、本書はコンラッドの "Englishness" という今後展開が期待されるテーマへの基礎資料として示唆するところ大と考えるが、おそらくはそれも著者が意図したことであ

ろう (Stape, "On Conrad Biography," 72)。

本文以外の構成を見ると、掲載の地図８枚は、今までのコンラッド伝およびレファレンス類の中で最も見やすく、参照価値が高いものである。また、写真 40 余点は、先行するナイデル本に掲載された写真との重複が注意深く避けられており、ロンドンの船員宿舎やコンラッドの葬儀など初めて目にする写真も含まれているほか、全点について原版の所在が明記されている。さりげなく Appendix に含められている A Guide to Pronunciation は、コンラッド関連のポーランド語やマレー語の固有名詞についてしかるべき発音を明示したリストで、日本人読者にはカタカナ書きを少しは正確なものに近づけようとする際に有用であろう。

この大部ではない伝記の中で比較的多くの頁を割かれているのが、"After" と題された最終章である。コンラッド没後の縁者それぞれの「その後」が詳述されており、ここにステイプ本の特徴の一つがあるともいえる。「シェル・ショックと浪費癖を抱えた長男が実在しない原稿を売ろうとして、詐欺罪で刑務所に１年服役した」(267) といったエピソードは、上記の *Oxford Reader's Companion to Conrad* (2000) などに記載済みではあっても、これまで伝記に明記されたことはなかった。また、妻 Jessie の出身や家族・係累についても、「新事実」として紹介されている事項が多い。こうした私的な事情がコンラッド作品の読みに関わるわけではない、と反発する読者がいるかもしれない。しかし、偶然と選択の結果としてイギリスに定住することになった一人のポーランド人が、筆一本で生活を組み立てていく過程において、所与の条件下でどのような配偶者を選び、家庭を作り育てることが可能であったか、そしてその子らは次の世代を生きるときにどのような苦悩があったか。それらは、「たった一人で自身の運命に立ち向かった人物」(261) との関わりにおいて、知るに値し、語るに値するものと著者が考えた結果であるに違いない。

III

このステイプ本をめぐって、2007 年の刊行以来、いくつかの主要新聞に書評が載っているが、その中で、Cedric Watts (*The Financial Times*) と Michael Gorra (*Times Literary Supplement*) による書評が重要と考える。二人

とも、このコンラッドの伝記が当代の最適任者によって書かれたものであることを承知し、本書の価値を好意的に評価した上で「不満」を指摘しているからである。

第3世代を代表するコンラッド研究者の1人 Cedric Watts は、「コンラッド作品は今日的話題である経済的帝国主義、テロリズム、独裁政権、似非民主主義などを扱っている。こうしたコンラッドの cultural power が提示されていないのが残念である」と指摘している。同様に、Michael Gorra は、*TLS* のコンラッド特集号の優れた巻頭エッセイにおいて、「事実 (facts) と時系列 (chronology) を第一義とする点において、ナイデル本とステイプ本は軌を一にしている。"これ一冊" の伝記としては、ナイデル本がその役を担っていくであろう。現在において最良のコンラッド伝の書き手であるはずのステイプ氏が facts の正確なる提示を第一義としているなら、新たに展開してきたコンラッド批評を含めた形での "評伝 (critical biography)" が誰かによって書かれることはあり得るのだろうか？」と問うている。この問いに、どう答えればよいのであろうか。「あり得ない」と悲観する理由はないにしても、それが書かれる機会はしばらく遠のいたと言えるかもしれない。

そもそも伝記とは、「それが書かれる時代と、書き手の人生経験なり性格なりを反映して然るべき」とは、ステイプ本の序文の書き出しである (ix)。2007 年に出版された 2 点の伝記は、第 3 世代と第 4 世代を代表するコンラッド研究者による、それぞれに個性的な、それゆえに、比較して判定するよりも、おそらくは Polishness と Englishness という相互補完の関係を読み取るのがふさわしい 2 点である。

Notes

1. 追加事項の一例として、同じポーランド出身の文化人類学者ブロニスラフ・マリノフスキーとコンラッドの交友関係についての記述がある。旧版では、1923 年時点で前者がコンラッド宅を訪問したという言及のみであるが、改訂版では、1913 年という早い段階で、マリノフスキーが最初の英文自著 *The Family among the Australian Aborigines* を持ってコンラッド宅を訪れていることが明記されている。出典は、不備で有名な英語版 *A Diary in the Strict Sense of the Term* (1967) ではなく、そのポーランド語原版である。

2. たとえば、10 行以上にわたる長い引用文が、ブロック・インデントされずに地の文にそのまま書き込まれているなど、北米の大学出版局にしては初歩的な組版上の不具合が多く、通読に忍耐が必要な一因にもなっていた。

Works Cited

Gorra, Michael. "Conrad's Sea Change." *The Times Literary Supplement,* 27 February 2008.

Najder, Zdzisław. *Joseph Conrad: A Chronicle.* Translated by Halina Carroll-Najder. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press, 1983.

Stape, J. H. "On Conrad Biography as a Fine Art." *The Conradian* 32, no. 2 (2007): 57-75.

Stape, J. H., and Owen Knowles. *A Portrait in Letters: Correspondence to and about Conrad.* Amsterdam: Rodopi, 1996 (*The Conradian* 19, nos. 1 and 2).

Watts, Cedric. "A Light in the Darkness." *The Financial Times,* 22 September 2007. <www.ft.com>. Accessed: September 2007.

（しだら　やすこ　武蔵大学非常勤講師）